目白大学　健康科学研究
第16号　2023年　123－130

Withコロナ時代の母性看護学教育の取り組み
～実習の質を保証するための現状分析から導いた教育実践～

藤田佳代子　小泉仁子
（Kayoko FUJITA, Hitomi KOIZUMI）

【要約】

《目的》コロナ禍において母性看護学領域では様々な方法を取り入れ教育実践をしてきた。本稿ではコロナ禍での実習の質保証のためのSWOT/クロス分析により導いた2021年からの教育実践および振り返りを報告する。

《方法》2020年度コロナ禍の１年間をふまえ、2021年度にSWOT/クロス分析を実施した。この分析結果に基づき、リスクを最小限にする実習方法を選択し、実習の質保証として実習に至るまでの母性看護学３科目の充実と各科目の継続性を強化する工夫を実施した。

《結果》分析から導いた実践により、短期間になった実習でも学びの質を保証できたと考える。また、コロナ禍以前からの教育実践の工夫は強みとなり質保証に効果的であった。

《結論》分析ツールを用いることで、現状を的確に捉え意思決定を可視化し共有できた。本実践は実習の質保証だけでなく母性看護学全ての科目の充実とその継続性を強化することにつながったと考える。

キーワード：SWOT/クロス分析、母性看護学、周産期実習

Ⅰ．はじめに

2020年度以降、コロナ禍により教育方法の変化を余儀なくされた。対面することが厳しい状況の中で、教員はICTを駆使しながら思考錯誤を重ね、教育実践をしてきた。2021年度になり、感染状態は長期化の様相を示し、学生の教育機会を守りながら、Withコロナとしての実践が求められている。

看護基礎教育における臨地実習施設は、多くが医療施設である。感染拡大状況により、2022年９月時点においても、教育方法の制約を受け医療施設で行う臨地実習については常に中止になる可能性がある。

深澤は「先のことが不確実な時、その戦略策定にあたっては、排除しきれない不確実性を最小限にし、ロジカルシンキングを駆使し、成功の可能性を高める必要がある。マネジメントとして、意思決定を形にし、可視化し、組織共有し、実行していくことが必要である。」[1)]と述べている。

そこで、母性看護学領域では、2021年度初めに環境分析ツールであるSWOT/クロス分析を活用し現状分析を実施した。取り巻く状況を網羅的にとらえ、そこから好ましい機会を活かし、何を強化できるかを考え、教育実践方法を検討し決定した。本稿では、この分析に基づく教育実践およびその振り返りを報告する。

Ⅱ．本学における母性看護学の学修と周産期実習を取り巻く環境

１．母性看護学領域の４科目と本学の母性看護学実習の特徴

本学における母性看護学の学修は、２年次春学期に母性看護学概論から開始し、同年秋学期に母性看護方法論、３年次に実習前集中講義として母性看護方法演習で看護過程と看護技術を学び、最後に母性看護学実習（周産期実習・ウィメンズヘルス実習）で完結する４科目である。

ふじたかよこ　：目白大学看護学部看護学科
こいずみひとみ：目白大学看護学部看護学科

２週間２単位の母性看護学実習について、２週間をすべて産科病棟で実習する形態にしている教育機関も多い。しかし、本学では2014年度から、１週間を産科病棟での周産期実習、もう１週間をウィメンズヘルス実習として実施している。ウィメンズヘルス実習では、女性の生涯にわたる健康の維持・増進にとって、社会環境の変化やそれに伴う問題が女性の健康にどのように影響しているのかを理解し、その解決方法を学ぶことを目標としている。水野[2]は、本学においてウィメンズヘルス実習を取り入れた教育実践報告の中で、「母性看護の対象の拡大、社会情勢から母性看護に求められるものの変化から、ウィメンズヘルス実習の必要性は意義ないところであった」としながらも、「同時に１週間で学ぶことになった周産期実習の成果との闘ぎあいでもあった」と述べている。周産期実習の１週間は５日間すべて施設実習として、産科病棟での経験をできるだけ多くするようにしてきたが、短期間での周産期実習の学びの充実は本学の課題でもあった。

２．周産期実習を取り巻く厳しい社会状況と、周産期実習の意義

少子化をはじめとし、晩婚化、晩産化による妊婦の高齢化、また精神疾患を含む多くの合併症の増加等により、周産期看護の対象者自体が少ないこと、さらにハイリスクである場合が多い。これらの状況を受け、厚生労働省は、H27年９月、母性看護学実習及び小児看護学実習について、学内演習も含む病院以外の実習を臨地実習として認める旨の通達を出している[3]。本学では、学生２名が１組の母子を受け持つ形態だが、実習初日に受け持ち可能な対象者がいない場合もある。多くの実習施設の小児および産科病棟はほぼ１年中実習を受けており、どの教育機関においても実習施設の確保に難渋しているのが実情である。周産期実習の実施継続は看護教育において課題の一つともいえる。

また、学生にとって母性看護学は、他領域の科目とは違う難しさを感じていることが指摘されている。母性看護学に関する苦手意識の形成に関する研究において山口[4]は、講義を受ける過程で苦手意識が形成され「覚えることが多い」「覚えにくい」「イメージがつきにくい」という認知に関する要因を報告している。さらに実習中も難易度が高く緊張や不安の強い実習であることが報告されている。本多ら[5]によれば、実習中のストレス要因として「看護過程」「知識のなさ」などが指摘されている。他領域の科目や実習とは対象の特徴も思考過程も異なる母性看護学では、学生が学修に苦心していることがうかがえる。

しかし、一方で、井上ら[6]は「分娩見学は、学生の感性に触れる体験となり、学生の感性を伸ばす、自己成長を促す重要な意味を持つ」と述べている。周産期実習では、他領域では触れることのできない場面も多く、学生にとっては大変印象深い実習になる。感性や自己成長という部分に触れられることは、周産期実習の大きな意義の一つと考える。

短期間になることで、さらに難易度が高くなる周産期実習に対し、学生の理解を進め、不安や緊張をできるだけ少なくして周産期実習ならではの学びの充実をすることが、教育実践の課題と言える。

Ⅲ．SWOT/クロス分析から導いた実践

１．SWOT 分析とクロス分析とは

SWOT 分析とは、現状を正しくとらえるためのツールである[1]。環境分析ツールにはいくつかあるが、SWOT 分析では、外部環境、内部環境を同時に分析することが可能な統合型の現状分析ツールであり、看護管理ではよく用いられる方法である。

SWOT 分析では、分析したい状況を取り巻く環境を外部環境・内部環境に分類し、さらに、プラス要因とマイナス要因で整理することで現状をモレなくダブりなくとらえるものである。内部環境のプラス要因を「強み」、内部環境のマイナス要因を「弱み」、外部環境のプラス要因を「機会」、外部環境のマイナス要因を「脅威」という。さらに、SWOT 分析で明らかにした現状をクロスさせて、以下の４点の今後の方向性を抽出・整理するのがクロス分析である[1]。

- 積極的姿勢（強みを活かし、機会を追い風にして、積極的に取り組んでいく）
- 差別化戦略（強みを活かして、外部環境の脅威を回避又は機会の創出を図る）
- 段階的施策（弱みを克服し、機会を確実にものにして、機会を失わないようにする）
- 専守防衛（弱みで、最悪の事態が起きないようにする対策）

SWOT 分析が「今」の現状を分析しており、クロス分析では「これから」の方略を挙げることとなる。

2．2021年度に実施した母性看護学実習の質保証のためのSWOT/クロス分析と実践方法案

2021年度初め、今後のWithコロナの教育実践方法を検討するため、母性看護学実習の質保証のためのSWOT/クロス分析を実施した（図１参照）。

分析から導いた実践方法は、

①「積極的姿勢、専守防衛」から、周産期実習は、５日間の実習を施設実習４日、学内実習１日のハイブリッド実習にする。限られた実習時間の中で、臨地でしか体験できない内容を確保する一方、実施が不十分な学習項目に対し、学内実習を１日確保し全体としての学びの充実を図る（表１参照）。

②「差別化戦略」として、実習の充実、質保証のために、実習に至るまでの概論、方法論、方法演習の教育方法の工夫と継続性の強化を図り、「Ｓ２：学生は方法演習での学習が予定通りできて基礎力はついている。」という強みをさらに強化し、基礎力を向上させる。また、学生が誠実に実習に臨む姿勢をさらに強化するため、先行研究で実習中のストレス要因として指摘されている知識不足や看護過程の学習強化に注力し、不安・緊張を軽減する。

以上の見解に至った。このアセスメントをもとに、母性看護学４教科で実践したこと、工夫点を列記した（表２参照）。

3．教育実践の実際

1）２年次の概論・方法論

２年次の概論、方法論の講義では2021年度にはすべて遠隔となった。このため、各回の講義動画を作成しオンデマンドで実施した。しかし、オンデマンドでは一方的になり講義内容の理解はもとより、母性看護に対する興味関心が高まりにくいことから、毎回の講義後、指定テーマに対し学びの記述や、感想、不明点を挙げる学びのカードの提出を課し、短文でも各回の

外部環境／内部環境	**機会（Opportunity）** 01：臨地実習施設は確保できており、信頼関係もある。 02：学内、遠隔への切り替えが可能。 03：実習病院の教育意欲が高い。	**脅威（Threat）** Ｔ１：新型コロナウイルス感染症が流行している。 Ｔ２：感染者が発生すれば実習が中止となる。 Ｔ３：新生児への感染対策が必要であるため新生児への看護実践および母子看護の実習が困難である。 Ｔ４：埼玉県男女共同参画推進センターの利用に制限がある。
強み（Strength） Ｓ１：専門性の高い教員で構成されている。 Ｓ２：学生は方法論演習での学習が予定通りできて基礎力はついている。 Ｓ３：学生は誠実に体調管理と実習に臨む姿勢を持っている。	**積極的姿勢（強みを活かし、機会を追い風にして、積極的に取り組んでいく）** Ｓ１＋Ｏ１：臨地実習と学内・遠隔のハイブリッドで教育していく。 Ｓ２＋Ｏ２：臨地での患者受け持ち看護実習経験を活かした実践的な教育が可能。 Ｓ３＋Ｏ３：教育方法の見直しにおいても教育効果が期待できる。	**差別化戦略（強みを活かして、外部環境の脅威を回避又は機会の創出を図る）** Ｓ１，Ｓ２，Ｓ３＋Ｔ３＋Ｔ４： 学生の教育ニーズおよび母性看護学実習の質保証ができるように、実習を充実させる。
弱み（Weakness） Ｗ１：遠隔授業や学内演習の対応も加わり教員の業務が過重である。 Ｗ２：教員、学生ともに、ワクチンを接種していない。 Ｗ３：新生児感染予防策により、受け持ち患者の看護経験が少なくなる。	**段階的施策（弱みを克服し、機会を確実にものにして、機会を失わないようにする）** Ｗ１，Ｗ２，Ｗ３＋Ｏ１，Ｏ２，Ｏ３： 実習施設と協働して教育内容の見直しと教育効果の確認を行う。	**専守防衛（弱みで、最悪の事態が起きないようにする対策）** Ｗ１，Ｗ２，Ｗ３＋Ｔ１，Ｔ２，Ｔ３，Ｔ４： 感染を起こさないように、日々体調管理をする。臨地での実習と学内および遠隔実習を組み合わせてハイブリッド型実習を計画する。

図１　母性看護学実習の質保証のためのSWOT/ クロス分析

注釈）2021年４月時点での分析であることから、ワクチンは未接種であった。
　　また母性看護学実習としてウィメンズヘルス実習も含まれている。

表１　2022年度　周産期実習　スケジュール表

曜日	月	火	水	木	金
場所	施設	施設	施設	施設	学内
実習内容	病棟オリエンテーション 受け持ち母子決定 情報収集、一部見学・実施	受け持ち実習	受け持ち実習	受け持ち実習 最終カンファレンス	新生児の看護技術確認 個別評価面談 16時　看護過程提出

表２　各教科の教育実践の工夫とその意図

履修時期	科目名	学習資料	工夫	意図
２年次 春学期	概論 （2021年度 オンデマンド）	講義資料 学びのカード リフレクション ペーパー	①　学びのカードへの返信 ②　リフレクションペーパーに対する教員からのメッセージ	遠隔授業を一方的なものにしない 学生との信頼関係構築 各回のテーマについて自分の言葉で言及し、興味関心を高める
２年次 秋学期	方法論 （2021年度 オンデマンド）	講義資料 学びのカード リフレクション ペーパー ワークシート	①　毎回リフレクションペーパー作成 ②　講義受講後の課題としてワークシート作成	概論からさらに具体的になった内容について思考し自分の言葉で言及する 教科書の知識を、看護実践の根拠に思考できるためのワークシート作成
３年次 開始前	方法演習の 事前学習	事前学習ワークシート 事例を読み解くシート	①　課題範囲を示し、周産期実習で活用するためのミニノート作成 ②　事前予習ワークシート ③　方法演習の事例を読み解くシート	方法演習を効果的に学習するための課題を課した 方法演習が実習に直結した学習であることを強調し、今後の（最も緊張が高まる実習の際に）自分に役立つという動機付けを強化する
３年次 ４、５月	方法演習 （2022年度 対面）	看護過程ガイド 看護技術ガイド 看護過程ワークブック リフレクション ペーパー	①　看護過程ガイド、看護技術ガイドとともに、看護過程の思考のテンプレートを示したワークブックを新たに作成 ②　ガイド、資料を活用しながら事例の看護過程を展開する	看護過程ガイドには、２年次の方法論で作成したワークシート、事前学習課題のワークシートを貼るページがあり、基本的知識や根拠となる機序が集約される 自分の字で書かれたワークシートには、看護過程に活用する根拠や計画を看護過程に活用できる方法で書かれていることで、自己の努力の積み重ねを実感し、自己効力感向上につなげる
３年次 ６-12月	周産期実習		①　方法演習資料を活用しながら受け持ち母子の看護展開 ②　新生児は窓越しで全身観察であるため、最終日学内で新生児の技術演習を実施する	知識の確認や基本的葉看護過程の展開は、手元の資料で対応しやすく、臨地で体験することで対象への理解が深まる 学内での新生児技術演習では、新生児シミュレーターを受け持ち児に見立て、臨地実習でのアセスメントを加えながら事例と演習がつながるよう声かけをしながら実施した

テーマに自分の言葉で言及できるよう工夫し、興味関心を高められるように考慮して対応した。さらに、そのカードに教員から返信をした。学生個々に返信ができない場合でも、提出されたリフレクションペーパーの意見や学びにふれ、学年全体に対し教員からのメッセージを返信して、双方向を意識し、学生との信頼関係構築に努めた。

概論からさらに具体的な内容になる方法論では、上記に加え特に実習に関連する講義内容について、講義後の課題としてワークシート作成を課した。ワークシートは、フリーシートではなく、教科書にある知識を穴埋めなどで確認しつつ、看護実践の根拠に思考できるように工夫して構成した。いわゆる宿題形式であるが、学生からの感想では、講義後に教科書を再度確認しながら手書きで作成することで、ただ読むより理解が深まったとの意見が見られた。また、次年度教科の方法演習、さらに実習でこのワークシートを活用することを伝え、学習の継続性の意識を強化できるよう、励ましを続けた。

２）方法演習の事前学習および講義

３年次開始直前の方法演習の事前課題では、課題範囲を示し、周産期実習で活用するためのミニノート作成で全体の復習をはかるとともに、事前予習ワークシートを新たに作成し、課した。方法論のワークシートと同様、実習に特に必要となる知識について、実習で活用しやすい形式にまとめられるよう構成を工夫した。

さらに、方法演習で看護過程を展開する事例について、展開に必要な情報に注目できるよう、事例を読み解くシートを作成し課した。周産期のカルテは他領域とは異なる項目も多く、履修の前に、どこにどんな情報があるのかの確認をし、カルテを見慣れておくことにつながると考えた。

３年次となり、本科目の履修期間である４、５月には、多くの科目で同時並行的に看護過程展開の講義が実施され、学生にとっては課題が多い時期を迎える。履修中に基本的知識を復習している時間は極めて少ない。

本学が母性看護学実習を周産期実習１週間とウィメンズヘルス実習１週間としていることから、周産期実習の準備科目として位置づけられる本科目は、コロナ禍以前から周産期実習が短期間であるという課題に対し、学びの充実に向けて教授方法および学習資料の充実に多くの工夫を続けてきた。

教授方法の工夫として、コロナ禍以前はアクティブラーニングの一つであるジグソー法を取り入れた。知識や思考力の向上とともに、多職種連携の基礎力として、連携・協同的態度を身につけることを目標とし、多くの仲間とコミュニケーションをとりながら学習を進めることができるよう構成した。しかし、コロナ禍ではこのジグソー法の特性上、実施することはできなくなった。

学習資料の充実にも注力してきた。看護過程ガイド、看護技術ガイドという２冊のオリジナルガイドブックを作成し、講義初回に配布した。２冊のガイドには、学習に必要な重要項目だけでなく、看護過程の思考を誘導するヒントを多く取り入れた。学生自身が記述する部分も多く、自主学習を促進するよう作成している。実習にも活用できるガイドを講義初回で手にすることは、実習準備という科目の位置づけを認識することにもなる。冊子形式で作成することで、資料の散逸を防ぎ、すべての学生が同じ資料を持って実習に臨めることも配慮した点である。2018年度に科目責任者になって以降、毎年２冊のガイドの内容の調整、充実をしながら現在に至っている。

また、2019年度には、看護技術ガイドに即した技術動画を計７本作成し、学生がいつでもアクセスできるように準備した。コロナ禍以前では、動画教材が現在ほど充実していない状況であり、配布された看護技術ガイドと同じ写真や説明で構成されている短時間の動画は実習中にも自己学習できる教材として学生に活用されていた。

そして、今回 With コロナへの対応として、今年度新たに看護過程の思考のテンプレートを示したワークブックを作成し活用した。授業準備をしている段階では、講義が全面遠隔になる可能性もあること、さらに学生が感染者や濃厚接触者として欠席を余儀なくされる場合も想定された。どのような状況においても、また多少の時間差ができても、講義内容をできるだけわかりやすく、公平に学生に届けたいとの思いで作成した。

さらに、資料の工夫として、２年次の方法論や事前課題で作成したワークシートと、本科目の学習資料である看護過程ガイドが連動するような構成とし、方法論、方法演習という２科目の継続性を強化した。方法演習の講義開始時に、２年次から自分で作成したワークシートをガイドの所定の場所に貼ると、該当ページの看護過程に必要な基本的知識や根拠となる機序が自分の文字で詳細に説明されたガイドになる。このような学習資料を活用しながら本科目を修了すると、展開した事例の状態や丁寧に機序が盛り込まれた一般的経過の看護過程が完成できる。

今年度講義を進める中で、「知識を確認しながら進めやすく、講義も理解しやすい」、「自分でもできると思える」「２年次に学習した内容を改めて理解できた」という意見があった。学生たちは、講義時間内に資料を活用しながら懸命に看護過程を進めていた。本科目終了時の学生の感想には「母性の看護過程への理解が進んだ」「機序を理解して展開できた」というものの他、「実習を楽しみに感じるようになった」との言葉が見られた。

３）周産期実習

2022年度の実習は2022年９月時点では春学期４グループの実践にとどまるが、ここまでの状況を報告する。

実習開始日、学生たちは、看護過程ガイド、看護技術ガイド、ワークブック、さらに方法演習で取り組んだ各自の看護過程と、これまでの学習成果物を実習に活用しやすい形で手にしている。臨地実習では、これらの資料を活用しながら受け持ち事例の展開をすることで、記録物は多いものの、受け持ち母子に合わせた看護展開を積極的に実施できており、提出期限に遅れたものはいなく、記述内容が大きく不足しているものもなかった。また、実習中には、正常経過の母子の「基本的な展開」を理解しやすいことで、初産、経産の違い、家族の受け入れ状況や、母乳や育児に対する思いなど、ひとりひとりに合わせた看護の必要性の理解、逸脱するケースへの地域連携対応など、それぞれの事例の特徴が際立ち、個別性への理解につながっていると感じられた。「同じ正常経過なのに、個別性があることがとてもよく理解できた」との感想を述べる学生が散見された。施設実習は４日間とさらに短縮したが、実習目標の達成度は高いものになったと考えられる。

Ⅳ．考察

１．ツールを用いた現状分析

深澤[1]は「ツールを使用する目的は正しく現状を理解し、問題を抽出し整理し、優先度付けをすることによって、不確実性を最小限にして成功可能性の高い戦略や目標を策定すること」であると述べている。

今回、周産期実習にフォーカスした分析であったが、結果として母性領域のすべての科目を見直し、さらに強化することとなった。現状を広くとらえることで、単に実習時間内の内容にとどまらず、２年間の学修を見通して戦略的に計画・実施できたことは、効果的な教育実践につながったと考える。

また、領域内において、今後の方向性を検討する時点において、ツールを用いて現状を可視化し共有できた。このため、共通認識を持って、戦略を練ることが出来たことは非常に有効であったと考える。さらに、それぞれの担当の細かな対応においても、常に同じベクトルで方法の検討、実施ができたと考える。

さらに、これまでも短期間であった５日間の施設実習をさらに１日減らすことについて、対応方法のアセスメントが領域内で共有できていたこと、施設実習を１日減らすリスクに対する対応が具体的に実施できていたことで、教員は安心して各場面の対応に取り組むことが出来た。また、実習施設に対しても根拠を持った説明ができた。

これらのことから、ツールを用いた現状分析により成功可能性の高い戦略や目標策定ができ、効果的な教育実践を促進できたと考える。

２．４教科の継続性と、学習意欲への支援

最終着地点である実習終了時に多くの学びを得るためには、概論、方法論、そして方法演習と、実習前の各科目において、今何が必要かという認識をもち、継続性を意識しながら２年次からの教育実践ができた。

梅﨑ら[7]は、母性看護に対する苦手意識への対応として、看護過程演習の強化や基礎的知識定着に向けた教材の工夫、対象をイメージしやすい教育方法の検討が急務と述べている。実習前の講義の段階で、「覚えることが多い」「覚えにくい」「イメージがつきにくい」といった苦手意識を醸成する部分に対し、ワークシートの作成で着実に資料を作成し、さらに実習中のストレス要因となる「看護過程」「知識のなさ」はガイドや資料の活用、方法演習の看護過程をテンプレートに展開でき、理解を進められたと考える。

また、基本をしっかりとおさえることで、受け持ち母子の個別性への理解を進めることができた。SWOT/クロス分析の「機会」である施設実習での受け持ちという貴重な経験を逃さず、そのメリットをしっかりと活用することができたと考える。

実習での看護過程展開は学生にとって難渋する課題である。この課題に対し、母性看護学の看護過程を学習する方法演習では、コロナ禍以前から学習資料を毎年更新させ、より理解しやすく、活用しやすい資料の充実に努めてきた。今回のSWOT/クロス分析では、それまでの本科目の取り組みによる実習までの基礎力を「強み」にできたことで、そこにさらなる工夫をした教育実践ができた。積極的姿勢（強みを活かし、機会を追い風にして、積極的に取り組んでいく）、差別化戦略（強みを活かして、外部環境の脅威を回避又は機会の創出を図る）をより効果的に展開できたと考える。

最後に、学生の主体的な学習姿勢について述べる。戸田[8]は、母性看護学実習での学生の自己効力感に影響する要因として、事前学習、遂行行動の達成などの要因を挙げており、事前学習を通じて実習時の技術や看護過程の展開についての自信を持たせることが生理的・情動的状態として実習への原動力となり、自己効力感に影響していたと報告している。今回の２年間の一連の学習は、２年次からの自分の学習の積み重ねの成果から遂行行動の達成を実感でき、自己効力感を高め、実習への意欲を高めることにつながったと考える。同時に、実習に対する不安や緊張を低減する一因となり、さらに次もできる、という自信につながり、主体的な学習を促進できたと考える。

三浦ら[9]によれば、自ら学ぶ人の要素として１）メタ認知：自らの学習プロセスを鷹の目で見ることができる、２）動機付けを保持することができる、３）学習行動を起こすことができる（学習方略が分かっている）以上の３つの観点が挙げられている。今回の２年間の教育実践をこの３つの観点で解釈すると、１）２年次からの方法論のワークシート作成では、おぼろげながら実習という先を見て、２）実習までの各科目においても常に実習につながる学習になると伝えて課題の目的を説明して動機付けを促進し、３）その時その時で、具体的な努力、取り組みやすい課題に取り組

む、ということが出来たのではないかと考える。経済産業省が社会人基礎力のひとつとして挙げている学生の前に踏み出す力（主体性・働きかけ力・実行力）[10]向上への支援は、各科目の教授にとどまらず常に意識すべき課題である。この観点についても少なからずアプローチできたのではないかと考える。

Ⅴ．結論

1．SWOT/クロス分析というツールを用いた分析を活用したことは、実習の質保証にとどまらず、母性領域すべての科目を見直し、さらに強化することとなった。現状を広くとらえることで、２年間の学修を見通した計画・実施ができた。
2．コロナ禍以前からの方法演習の学習資料の充実や取り組みを実習までの基礎力として「強み」にできたことで、With コロナではさらなる工夫をした教育実践ができた。積極的姿勢、差別化戦略をより効果的に展開できたと考える。
3．２年間の継続性のある学習により、学生は実習までの自分の学習の積み重ねを実感し、自己効力感、実習への意欲を高めることが示唆された。

今後の課題

今後も、感染状況により制約を受け、臨地実習が全面不可のリスクもある。この場合、臨地で得られる体験に代わる学習を準備する必要がある。限られた状況で全く同じ成果を求めることはできないが、学内だからこそ伸ばせる力もあると考える。ICT や様々なシミュレーターの活用、さらにシミュレーション教育を充実することは、今後の課題である。

利益相反

本報告において、開示すべき利益相反状態はない。

【文献】

1）深澤優子：SWOT クロス分析。16-73，日総研出版（2015）
2）水野千奈津，刀根洋子，瀬山紀子，野崎百合子，杉田理恵子：ウィメンズヘルス実習の取り組み。健康科学研究10，41-48（2017）
3）厚生労働省医政局看護課長：「母性看護学及び小児看護学実習について」医政看発0910第５号　平成27年９月１日
4）山口静江：母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因。日本看護協会論文集，母性看護43，84-87（2013）
5）本多洋子，石沢敦子：母性看護学実習における看護学生のストレスの緩和をはかる教員の指導要因についての検討。桐生短期大学紀要18，117-123（2007）
6）井上沙織，佐々木明香：母性看護学実習での分娩見学の学び。日本看護協会論文集，看護教育44，122-125（2014）
7）梅﨑みどり，富岡美佳，井上理恵：母性看護学実習における教育方法に関する文献の検討。山陽論叢21，11-18（2014）
8）戸田美幸：母性看護学実習において看護学生の自己効力感に影響を与える要因（文献レビュー）。聖泉看護学研究７，41-46（2018）
9）三浦友理子，奥裕美：臨床判断ティーチングメソッド。142，医学書院（2020）
10）経済産業省　人生100年時代の社会人基礎力について https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf（2022年９月10日アクセス）

（2022年９月26日受付、2022年12月10日受理）

Challenge of providing maternity nursing education to cope with the age of COVID-19: Implementation of education introduced by current state analysis for quality assurance of nursing practicum

Kayoko FUJITA, Hitomi KOIZUMI

【Abstract】

Objective: In the age of COVID-19, we have put a variety of techniques into practice in the field of maternity nursing education. This study demonstrates and evaluates our educational program's execution, which will begin in 2021, based on a SWOT analysis for maternity nursing practicum.

Methods: We made the SWOT analysis in 2021 in consideration of the situation in the previous year 2020) of the COVID-19 pandemic. Based on the analytical findings, we decided on a low-risk implementation strategy for the practicum and made an effort to improve three maternity nursing education courses offered before the nursing practicum by deepening their connections with one another to ensure the quality of the final practicum.

Results: Our difficulty based on the SWOT analysis seemed to assure the quality of the practicum even though the practicum term was shortened. Since the COVID-19 epidemic, we have made numerous efforts to improve the student's education, and these efforts have shown to be successful in ensuring the practicum's quality.

Conclusions: The use of the analytical tool made it possible to figure out the current situation and visualize and share the decision-making process. Our implementation in maternity nursing education is thought to not only guarantee the caliber of the final practicum but also to upgrade all of the maternity nursing subjects and improve the links between the disciplines.

Keyword: SWOT analysis, maternity nursing, perinatal practicum

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University